

(8)〔書評〕『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』・『奄美方言基礎語彙の研究』

〔書評〕

平山輝男編著

『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』

平山輝男編著

『奄美方言基礎語彙の研究』

村山七郎

両書(『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』は平山1983と略す。『奄美方言基礎語彙の研究』は平山1986と略す。)は平山輝男氏が東京都立大学及び国学院大学で養成した琉球方言研究者たちの協力のもとに、しあげられた。平山1983の協力者は久野マリ子、久野真、平沢洋一、中条修、加治工真市、多和田真一郎、杉村孝夫、大野真男の諸氏。平山1986の協力者は大島一郎、久野マリ子、久野真、内間直仁、杉村孝夫、大野真男、中田敏夫、木川行夫、加藤和夫、中村妙子の諸氏。

1960年代に平山輝男氏は中本正智氏との共著『琉球与那国方言の研究』(1962年)、大島一郎・中本正智氏との共著『琉球方言の総合的研究』(1966年)、同じく大島一郎・中本正智氏との共著『琉球先島方言の総合的研究』(1967年)を発表し、1980年代に入って上記の琉球方言の二つの基礎語彙研究書を発表した。その前に『全国方言基礎語彙の研究序説』(1979年、明治書院、728頁)と『北奥方言基礎語彙の総合的研究』(1982年、桜楓社692頁)を発表している。驚くばかりの調査・研究の成果である。

平山輝男氏のこのような活動は、すぐれた教育者であることと切りはなせない。内間直仁、加治久真市、中本正智、野原三義氏らのような現在、第一線で活躍する琉球出身琉球語研究者を養成し、これらの研究者はその師に全面的に協力している。私は、平山輝男氏を頂上とするこの研究者集団を平山山脈と呼ぶ。それは日本の言語学界に高くそびえている。平山山脈のような存在は言語研究の盛んな外国においてもあまり例はないと思う。

さて、日頃、平山輝男氏の著述から多くのことを教えられている私ではあるが、上記二著述の書評を書くには私はあまりにも不適任であることは自他ともに認めるところである。ただ日本語の史的・比較的研究にかかわっている者の一人として、比較研究の立場から見て、両著述の資料と関連して二、三の点について述べてみたいと思うだけであって、以下述べることは常識的な「書評」からかけ離れたものである。

平山1983、平山1986は宮古諸島及び奄美の沖永良部島、徳之島の方言の音韻、アクセント、語法の深い研究と豊富な基礎語彙資料とから成る。音韻、アクセントの部について論評する意図は私にはない。基礎語彙の部はアルファベット順又はアイウエオ順に方言単語を配列したものでなく、実生活からの多くの用例や関連語を示すことによって、語の意味を明確にしようと努めていることがよく看取される。この立場は言語学史上有名なオース

トリアの“Wörter und Sachen”学派のそれと一脈相通じるものがあるように思われる。このような立場からの方言調査に接した場合、被調査者は自分たちの生活を正しく理解し、記録にとどめてくれるものと受けとめて、調査者に積極的な協力したのではあるまいか。

具体的な例をあげてみよう。「めし(飯)」の項には、^{ヒラ}平良方言のミシウ(共通語のメシ)のほかマイウミシウ「米の飯」、マイウヌイウ「米の飯 水を多めに入れてにぎれる程度にゆるく炊いた飯」、マイウジュウ「米の粥」(前者よりさらに水を多めに入れて炊いた飯)、ムーバンマイ「芋飯米 主食としての薩摩芋。煮たもの」、ムーヌイウ「芋の飯 薩摩芋を煮てすりつぶしたもの」、フチウチャー「神前に供えるご飯のつき方。ふたつのわんにいっぱい入れて合わせ、一方のわんをとり、山盛になるようにしたもの」が示される。生活をビビッドに反映する言語資料である。上記のマイウヌイウ「米の飯」、ムーヌイウ「芋の飯」のイウは池間島方言のイー i:「おにぎり用に炊いたご飯」、多良間島方言のイウー i:「飯」と同じく古代日本語のイヒ(武烈前紀、推古紀の伊比^{イヒ}「飯」) ipi(『名義抄』の声調はイ・ヒウ・ヘス「饑」のイ・ヒ)に対応することは言うまでもない。平山 1986 p.603 には沖永良部島和泊・知名方言で「ばんめし」が ji: とあり、「飯」^{イヒ}に対応するよう見えるが、これは夕飯^{イヒ}に由来するであろう。ここで飯と関連して問題としたいことがある。それは古代日本語でア行のイとヤ行のイとの区別はなかったが、ア行のエとヤ行のエとが10世紀ころまで区別されていたように、先古代日本語の段階では i と ji との区別が存在したのであるまいかということである。ことによるとその区別の名残が琉球方言の中に見られないだろうか。残念ながら平山 1983, 平山 1986 の資料から見ると、その痕跡が残っていないようである。ところが今から60年前の、1920年代に行なわれた現地調査にもとづく宮良当社『八重山語彙』(東洋文庫、1930年)には八重山の与那国島方言で「飯」^{イヒ}が ji:、石垣島真栄方言、新城島、波照間島方言で ji: とされている。他方、「西」を表わすイリ(太陽の入り)は新城島方言で i: ri、真栄方言でも i: ru(西風は iru-kazi)であり、「西風」は波照間、与那国でも ir'i-kazi である。「入り」のイを ji~ji で表わした例はない。入りは^{イヒ}*i:-ri に由来し、その語幹^{イヒ}*i:-はツングース諸語の i:- (共通ツングース語 *i:-) 「入る」に対応する。この点から見ると入ルのイは ji でなくて i であったと見られる。なお首里方言の ?ijug「入る」(下降型アクセントは ?i:- 起源を思わせる)も参照のこと。1920年代の八重山方言の一部にはア行のイとヤ行のイとの区別の名残が見られ、飯^{イヒ}が ipi でなく jipi に由来することを示しているように思われる。ところで日本語とアルタイ諸語との比較が示すように、日本語の j-の一部は ʒ- に由来する。他方、イヒ「飯」の語源を理解する上に大切な資料が『名義抄』(観智院本)に見られる。そこでは啖、噉(ともに「食う。くらう」の意味)をクラフ、ハム、イフなどと訓んでいることから、これまで言われてきたように、イフ「食う」という動詞が存在したことがわかる。イヒはこの動詞の連用形起源と見られこの点からすればイフは四段活用であり、その幹は jip-<*ʒip- であると見られる。これは「食う」を表わすツングース諸語の ʒəp- (ただしエヴェンキ語バルグジン方言は ʒəp-, E. I. チトフ『ツングース・ロシア語辞典』イルクーツク 1926, p. 52 では ʒəp~ʒip- 「食う」, A. O. イワノフスキー, Mandjurica, ペテルブルグ 1894, p.35 のソロン語は ʒib-) と同源と見られる。ここで *ʒip->jip- から連用形 jipi 「飯」という語形がどの

ようにして形成されたか、そのプロセスを考えてみたい。いったい四段活用動詞の連用形はどのような構造であろうか。

かつて大野晋氏は「日本語の動詞の活用形の起源について」(『国語と国文学』1953年6月号。この論文と私との関係については拙著『日本語の誕生』, p.208 参照) という画期的とも言える論文の中で、四段動詞幹を子音幹と見た。たとえば四段動詞連用形入り iri, 脱キ(脱ギの古形) nuki(これらは大野晋氏の挙げた例ではないが)から、共通の接辞・iを除いた ir-, nuk-が語幹であると見たのである。ところが、他の諸言語よりも日本語との系統関係が深いと見られるツングース語^{注4}を見ると、「入る」という意味の動詞の幹は i:-^{ステム}であり、「脱ぐ」という意味の動詞の幹は luk-^{ステム}~nuk-である(エヴェンキ語 luk-~nuk-, ラムート語 nuk-, ネギダル語 lok<luk-「脱ぐ」)。これらの幹に不定時接辞・ra~^{アオリスト}ra(これを「アオリスト」接辞と最初に規定したのは N. ポッペ『ツングース語研究資料 バルグジン・ツングース方言』, レニングラード 1927, p.9 である), 現在分詞接辞・ri~^{アオリスト}ri: がつくとき, r は母音幹の後では不変であるが子音幹の後では幹末子音の影響をうけて変化する。たとえばエヴェンキ語では幹末子音 k, p, s, t の後で r は t となり, m, ŋ, n の後で n となる(G. M. ワシレーヴィチ『エヴェンキ語方言概説』, レニングラード 1948, p.45)。ネギダル語では・ra, ・ri: の r は動詞幹末子音に完全に同化する(V. I. ツィンツィウス『ネギダル語』, レニングラード 1982, p.18)。これらの点を考慮すると, iri (入り), nuki (脱キ) の共通の接辞を・i と決めてしまうことが正しいかどうか, 問題である。ツングース諸語と同じように, iri 入りは前述のように, *i:-^{注5}ri に由来すると見られ, *i:-はツングース諸語の i:-「入る」と同源。脱キの方は語幹 nuk-に・ri の接尾した nuk-ri の r が, ネギダル語における同じように, 幹末子音 k に同化し, *nuk-ri>nuk-ki>nuki となったと推定される。連用形入り iri と脱キ nuki との共通接辞は表面的にはたしかに・i であるように見えるが, そうではなくて, ・ri^{注5}であろう。nuk-ki と類似したものは平山 1986, p.16 の沖永良部島知名方言の「書く」(終止形) hakkjju (hakkjju^{注6} jumū) (私見によれば kakki-wu-mu に由来)に見られる。kakki は nuk-ki と同じく, ka k-に・ri の接尾した形からの変化ではあるまいか。

このように見ると, jip-「食う」からのイヒ「飯」の成立のプロセスは次のようであったと思う。

*ʒip-ri > ʒip-pi > jipi > ipi

ツングース諸語の ʒəp-~ʒəp-~ʒip-「食う」と同源の*ʒip-に, ツングース諸語の現在分詞接辞・ri~ri: と同源の接辞のついた形から生まれたイヒ「飯」の発達形が琉球諸島に分布しているのは興味がある。

次に語法の面の問題として先ず一つの格接辞を取上げてみたい。

平山 1986, p. 846 は沖永良部島和方言の方向を示す接辞 tʃi について述べる。「チは…文法的には方向格を表す。」その例として, マーチ フー「ここへ来い」, ヤマチ ニューン「山へ登る」など多数の用例を示す。p. 880 では知名方言の同じ接辞を示し, p. 916 では徳之島亀津方言のカチウ katsi^{注7}, チウ tʃi^{注8}を示す。チ, チウ, カチウは ti 及び kati にさかのぼる。

る。他方、古代日本語の志向形(ムの形を一人称者が用いるばあい)は $jipamu < *ʒip\cdot ra\cdot mu$ ^{注13}である。

南ツングースのオルチャ語、ナーナイ語(文語)のばあい、動詞幹に $\cdot ra\sim\cdot r\grave{a}$ がつき人称接辞が付せられると直説法「第二現在形」がつくられ、動詞幹に $\cdot ri$ がつき人称接辞が付せられると、「第一現在形」がつくられる。これら二つの現在形のちがいについて O. P. スーニクの『オルチャ語』(レニングラード 1985)には説明がないが、T. I. ペトロワ『ナーナイ・ロシア語辞典』, 1960, p. 199 以下にナーナイ語の二つの現在形について次の説明があり、これはオルチャ語にもあてはまるであろう。「第一現在形と第二現在形とは意味がちがう。第一現在形、例えば $mi\ ʒoboi$ ($< *ʒobo\cdot ri\cdot wi$ 。引用者。 $ʒobo\cdot < *ʒoba$ 「働く」は満州語 $ʒobo\cdot < *ʒoba$ 「苦しむ。なやむ」と同源。日本語「弱」 $jowa < *ʒoba$ -参照)は「私は(今)働いている」であり、第二現在形 $mi\ ʒoboambi$ ($< *ʒobo\cdot ra\cdot mbi$ 。引用者)は「私は失業していない(私は働く)」である。第二現在形は動作の時を意味するのではなく、動作の習慣性を表わす。」^{注15}

オルチャ語の $ʒ\grave{a}p$ -「食う」(前述のようにエヴェンキ・バルグジン方言 $ʒ\grave{e}p$ -、ソロン語 $ʒib$ -、チトフの挙げるツングース語 $ʒ\grave{e}p\simʒip$ = 日本語 $jip < *ʒip$)の直接法の第一現在形、第二現在形の一人称複数形を示しておきたい。

第一現在形 $ʒ\grave{a}p\cdot ti\cdot pu$ ($< *ʒ\grave{a}p\cdot ri\cdot tpu$)

第二現在形 $ʒ\grave{a}p\cdot t\grave{a}\cdot mu$ ($< *ʒ\grave{a}p\cdot r\grave{a}\cdot mu$)

オルチャ語、ナーナイ語では一人称複数の包含形(話し相手をふくむ「我々」)・排他形(話し相手をふくまない「我々」)の区別が失われ、動詞の人称接辞においてもその区別がなくなった。 $ʒ\grave{a}p\cdot ti\cdot pu$ の $\cdot pu$ は包含形接辞 $\cdot tpu$ に由来し、 $ʒ\grave{a}p\cdot t\grave{a}\cdot mu$ の $\cdot mu$ は排他形接辞に由来する。従って、古くは排他形の $*ʒ\grave{a}p\cdot ti\cdot mu$ ($< *ʒ\grave{a}p\cdot ri\cdot mu$) の存在したことが十分に考えられる。

これをさきに復元した宮古方言、川^カ平^{ヒラ}方言の終止形 $*jipimu < *ʒip\cdot pi\cdot mu < *ʒip\cdot ri\cdot mu$ 及び古代日本語の志向形 $jipamu < *ʒip\cdot pa\cdot mu < *ʒip\cdot ra\cdot mu$ と比較してみると、宮古方言、川平方言の終止形はオルチャ語の第一現在形に、また古代日本語の志向形はオルチャ語の第二現在形に対応するように見える。ちがう点は $*ʒ\grave{a}p\cdot r\grave{a}$ と $*ʒip\cdot ra$ という点、および $*p\cdot r > p\cdot t$ という変化と $*p\cdot r > p\cdot p$ という変化の点である。これらのちがう点は両者の関係を否定してしまうものではないと思う。「食う」の共通ツングース形は $*ʒ\grave{a}p$ -と見られ、それが一部で $ʒ\grave{e}p$ -に、他の部分で $ʒip$ -、 $ʒib$ -になり、日本語でも $*ʒ\grave{a}p$ -から $ʒ$ の影響で $*ʒip > jip$ -と発達したものであろう。また $*p\cdot r > p\cdot t$ という変化はツングース諸語に見られ、 $*p\cdot r > p\cdot p$ という変化はネギダル語に見られることについては前述した。 $*ʒ\grave{a}p > *ʒip$ -に $\cdot r\grave{a}$ でなく $\cdot ra$ が日本語でつくことは母音調和の弱まりによって説明される。

これらの点を考慮すれば、飯^{イヒ}の土台¹となった動詞食¹フーその幹は $jip < *ʒip$ —— の宮古方言、川平方言の終止形の、推定される最古形 $*ʒip\cdot ri\cdot mu$ および古代日本語の志向形の、推定される最古形 $*ʒip\cdot ra\cdot mu$ はオルチャ語の推定される最古の第一現在形 $*ʒ\grave{a}p\cdot ri\cdot mu$ 及び第二現在形 $*ʒ\grave{a}p\cdot r\grave{a}\cdot mu$ と一致するように思われる。この一致が表面的な、偶然の一

致でないかどうか、よく検討してみる必要のあることは言うまでもない。

以上、平山 1983, 平山 1986 の資料の中の二、三の点について、日本語の歴史的・比較的研究の立場から考察して、あまりにも大胆な仮説をたてた。

平山 1983, 1986 及び 1988 年に出版が予定されていると聞く『琉球先島方言の基礎語彙の研究』の資料は比較言語学的研究の宝庫であると思われる。世界の日本語比較研究者が今後、平山山脈のこれまでの、また今後の調査・研究の成果に大きな注意を払うようになることは確実である。

ツングース・満州諸語分類表。 O. A. コンスタンチーノワ 『エヴェンキ語』(モスクワ・レニングラード 1964, p.3)

北分枝	南分枝	西分枝
エヴェンキ語	ナーナイ語	満州語
ラムート語	オロツコ語	女真語
ネギダル語	オロチ語	
ソロン語	オルチャ語	
	ウデヘ語	

- 注1 ただし波照間で「飯茶碗」は i:ma:ri, 与那国では「乞食=飯乞ふ者」は i:kuja:, 「飯茶碗」は i-magai である。
- 注2 『名義抄』でイルでイは高平調。高平調母音に対応するアルタイ諸語の母音は長母音と見られるから、イルのイは i: に由来すると見られる。
- 注3 満州語 ʒe-「食う」も ʒep- に由来することは、命令形 ʒefu からわかる。オルチャ語 ʒap-「食う」, ʒapu「食え」参照。N. ポッペ『アルタイ諸語比較文法』第一部, p. 27 も参照されたい。
- 注4 本書評の最後の部分に簡単なツングース諸語の分類表を示した。
- 注5 未然形入ラ ira, 脱カ nuka の共通の接辞も・a でなくて、・ra であると見られる。母音幹にそれがつくばあいには r は不変で、子音幹につくばあいには r は変化する。i-ra「入ラ」, *nuk・ra*nuk・ka>nuka。
- 注6 kak-は低平調。『名義抄』には書カクとある。「書く」は「掻く」(指や道具で物をひっかく)に由来することは一般に説かれておおり。「掻き」を表わすのに万葉 11-2408 で「削カキ」を用いていることから『時代別国語大辞典上代編』p. 179 は「掻く」には「掻いて削り取る・そぎ取る」の意もあつたろうと見る。私は現代朝鮮語 kkakk-「削る」<17世紀文献 skak=kkak-「削る」<15世紀文献 kask- (低平調)=kakk-「削る」を日本語 kak-「掻く」と同源と見る。李基文『国語音韻史研究』, ソウル 1972, p.55 参照。
- 注7 仲宗根政善『沖縄今帰仁方言辞典』, 角川書店, 1983年, p.244 にもヤマー「ち」ヒ「ちユン(山へ行く)」, 「メ」ち あガー「チュン(前へ進む)」などが出ている。
- 注8 『今帰仁方言辞典』, p.103 にもこれと同源のカてィ kat'i「へ、格助詞」があげられ、「カ」は「ありか」などの「か(所)」, 「てィ」は「いづち(古語)」の「ち」と同系で方向をあらわす」と述べ、ヤマー「カてィ」ナ「ブてィ」ヒ「チュン」[山へ登って行く]などの例文を示す。この解釈は正しいと思う。
- 注9 simata は *himata にさかのぼる。*h-はツングース語においては南分枝のオルチャ、ナーナ

(14)〔書評〕『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』・『奄美方言基礎語彙の研究』

イ、オロッコ語にのみ残る。*h-はiの前でこれらの三言語ではsとなっている(*hi>si) (ペンツィング『ツングース諸語』, p. 42 ff. 参照)。日本語 simo「霜」はオルチャ語の simata「雪」などと同源と見られ、日本語と南ツングース語との近い関係を示す一資料である。日本語ではi以外の母音の前では*h-は消えている。たとえばエヴェンキ、ソロン、ネギダル語 asa-「追う。追跡する」、オルチャ、オロッコ hasa-, ナーナイ hasasi-「同」に対応する古代日本語 asa-ni (武烈前紀 阿婆理「さがし求める」) 参照。アサリ、シモの例はサ行音子音が古くは凡て破擦音だったろうとなす説の正しさを疑わせる。*h-の消滅のもう一つの例をあげよう。それは öjōgi「泳ぐ」<*əjən-ki である(『名義抄』.オ.ヨク, .オ.ヨク)。エヴェンキ、ラムート、ネギダル語 əjə:n-「泳ぐ。流れを下る」に対し、オルチャ語、オロッコ語 həjən-「泳ぐ。流れを下る」、ナーナイ語 həjə:n-「同」。中期朝鮮語 həjə<həj-ə「泳いで」(<*həjə-「泳ぐ」)も参照。

注 10 この形の起源については別の機会に述べてみたい。

注 11 オルチャ語の「第一現在」の三人称単数形は動詞幹プラス・ri であって、形は kakI<*kak-ri と同一である。

注 12 エヴェンキ語・mun, *wun, ソロン語・mu^o, ラムート語・(w)un, *mun, ネギダル語・wu^o, オロチ語・mu, オルチャ語・mu。ペンツィング『ツングース諸語』p.111, ツィンツィウス『ツングース・満州諸語比較音声学』, p.276 以下参照。この接辞が一人称複数排他形 bu (その斜格幹は bun~mun) と関係のあることは言うまでもない。ナーナイ語、オルチャ語は buə<*büə, 満州語は be<*büə。日本語のア(我・吾)が単数的な意味をもつのに対しワは起源上複数を表わしたのではあるまいか。wa は *büə の陽性母音的異形 *bua によって由来するのではあるまいか。

注 13 *ʒip-は陰性母音幹であるから、母音調和が厳密に行なわれたならば、*ʒip-rə-mū(>イホム)のはずであるが、母音調和が弱まっていたために、*ʒip-ra-mu (>イハム)となったのであろう。ついでながら食フ(終止形)は*ʒip-ri-wu>*jippi-wu>jipu という構成であると見られ、*wu が *mu の異形である可能性があると思われる。*jippi-wu>jipu という変化については橋本進吉『国語音韻の研究』, p.243 参照のこと。

注 14 ナーナイ語のウスリー方言では「第一現在形」に相当するものはなく、動詞幹プラス・ra~rə プラス人称接辞の形だけがあり、これは直接法現在・未来形と呼ばれる(A. I.セム『ナーナイ語方言概説。ピキン(ウスリー)方言』, p.68)。

注 15 ナーナイ語では第一現在形の三人称単・複にそれぞれ人称接辞・ni と・ci がつくが、第二現在では単・複とも人称接辞がつかず、複数形では単に複数を示す・l がつくだけ。オルチャ語では第一現在形で三人称単数の人称接辞・ni が必ずしもつかず、複数でも・l がつくことがあるだけ。第二現在形では三人称単・複とも人称接辞はつかず複数のばあい・l がつくことがあるだけ。この問題については池上二良氏の、The Category of Person in Tungus: Its Representation in the Indicative Verbs.「言語研究」, 88号にくわしい。

(昭和62年3月17日 受理)